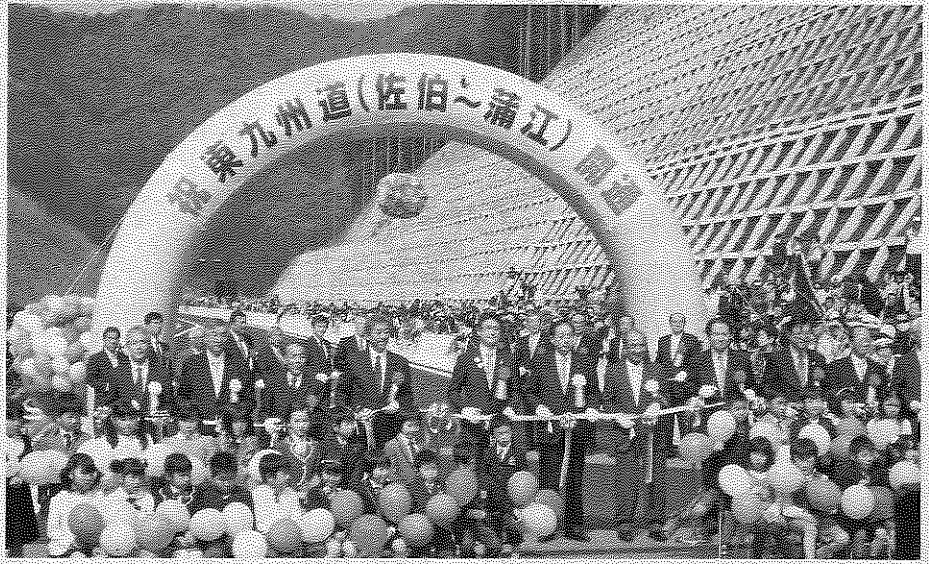
命をつなぎ 産業興す

平成の高速道路はこうして生まれた

東九州道 ④


祝 東九州道（佐伯〜蒲江）開通

東九州道佐伯—蒲江間の開通式。佐伯の海産物は普及の好機を迎えた—平成27年3月

「このままでは患者さんが亡くなってしまう」

平成28年3月、大分大医学部神経内科の助教、藪内健一（50）は慌ただしく電話を架けた。

藪内健一氏

藪内は延岡市医師会病院（宮崎市延岡市）で、当直勤務中だった。そこに、めまいを起こし、嘔吐を繰り返す85歳の男性患者が、別の病院から搬送されてきた。MRIなど詳細な検査をし、脳底動脈閉塞症だと判断した。

脳梗塞の中でも危険性が高い。詰まった血管にカテーテルを通し、血流を戻す治療が必要だった。

同医師会病院には、必要な設備がなかった。

藪内は、周辺の医療機関を当たった。だが、受け入れ可能な病院は見つからない。最後の望みをかけて、医学部同期で脳血管治療の専門医がいる大分赤十字病院（大分市）に電話した。

「すぐ、こちらに連れてきてください」

患者の容態は一刻を争う。救急車で搬送を始めた。東九州道延岡インターチェンジ（IC）から大分を目指した。

高速道路は信号もなければ交差点もない。一般道よりもカーブが少なく、揺れも小さい。

1時間50分で大分赤十字病院に到着した。一般道より30分短縮できた。治療は無事に終わり、男性は一命を取り留めた。「高速のおかげで、命がつながった」。藪内は胸をなで下ろした。

救急患者だけでなく、藪内自身が毎週、東九州道を利用している。

延岡市内の公的病院には、21年から神経内科医がいなかった。患者は、大分や宮崎両市の病院に行くほかない。延岡から大分市まで、車で片道2時間近くかかる。

延岡市などから大分大医学部への要請もあり、藪内は27年4月から、週末は延岡に行くようになった。

毎週金曜日の午前6時半、大分をマイカーで出発し、延岡へ。昼間は外来診察にあたり、そのまま翌土曜日の午前8時半まで、宿直する。

決して楽な勤務ではない。それでも東九州道が開通したことで、片道1時間余りで移動できる。同じ大分県内にある遠隔地の病院に通うのと、それほど変わらない。

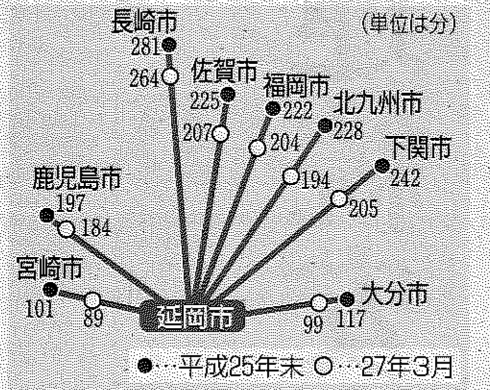
「延岡が物理的にも心理的にも近くになった」。藪内はそう感じる。

東九州道は28年4月、北九州市から宮崎市までが開通した。その結果、宮崎県内の大病院から、医師不足が顕著な延岡への医師派遣が拡大した。

国土交通省延岡河川国道事務所の調査によると、開通区間が拡大する27年、宮崎大医学部（宮崎市）から宮崎県立延岡病院に、非常勤の眼科医の派遣が始まった。翌28年には呼吸器の医師の派遣も始まり、延岡病院に呼吸器外科ができた。

東九州道は患者の命を救い、市民の健康に直結する道路になった。

東九州道開通による移動時間の変化



※九州経済調査協会の公表データを基に作成

元気な東九州は「道路でもつ」

× × ×

交通インフラの欠如は、生命に関わる。延岡市民がそう痛感する出来事が、平成2年に起きた。

9月27日、宮崎空港（宮崎市）から延岡に向かう旭化成のチャーターヘリが、消息を絶った。翌日、日向市内の山中で墜落した同機が見つかった。社員や操縦士ら10人全員が死亡した。

ヘリは、出張で宮崎空港を使う社員のために、旭化成が毎日4往復飛ばしていた。年間延べ1万5千人の社員が利用していた。

旭化成は延岡の地で生まれた。同社と延岡は、一緒に成長した。

鉄道や陸路で宮崎空港までもっと早く行けたなら、ヘリは不要で、犠牲者も出なかった—。そんなやりきれない空気が、市民の間に流れた。

首藤正治氏

首藤正治（62）も「大変なことになった。県北の活性化も足踏みし、市民も混乱するかもしれない」と懸念した。事務機器販売業を経営する首藤は、青年会議所のメンバーとして、東九州道の早期全線開通を訴えた。

18年2月、首藤は市長に就任した。市職員に訓示した。

「いずれ高速道路は全線開通する。だが、それがゴールではない。道路をどう活用し、まちづくりにつなげるか。そんな発想で仕事に励んでほしい」

首藤自身も、東九州道を地域振興に結びつける策を練った。

東九州道を使って延岡市に大勢の著名人を運び、開催にこぎ着けた文化戦略会議—平成27年11月

25年3月末、若い女性に人気の東京ガールズコレクション（TGC）を誘致した。27年11月には全国から文化人を集める「エンジン０１文化戦略会議オープンカレッジinのべおか」を企画した。

料理評論家の山本益博を大会委員長に、作家の林真理子、作詞家の秋元康、作曲家の三枝成彰、実業家の堀江貴文ら、３日間で総勢１２０人を講師に呼ぶ大イベントだった。

成功に欠かせないのが、講師のスムーズな移動だった。

何しろ、講師全員が多忙を極める。「午後の飛行機でしか到着できない」「帰りはこの便に間に合わせたい」。そんな話が講師側から相次いだ。

26年3月、日向IC—都農ICが開通し、延岡から宮崎空港まで1時間25分でつながっていた。

延岡市企画課主任主事の伊藤弘人（38）は、裏方作業のチーフとして、講師陣の一覧表を手に、綿密に移動計画を立てた。宮崎県バス協会と連携し、大型バスをチャーターした。それでは足りないので、市の公用車も含めた計十数台の車を準備した。

大変な作業だったが、「東九州道があって助かる。渋滞もなく、計画を立てやすい」と感じた。

イベントは成功した。多くの講師が、「また延岡に来たい」と、市長の首藤に握手を求めた。

「高速道路がなくても街に魅力があれば人は来る、という人もいる。だが、ちゃんとした交通インフラがなければ、一度に大勢の著名人を呼ぶことはできず、たくさんの観客が来ることもない。来てもらってこそ、魅力を伝えられる」。首藤は交通道路の必要性を実感した。

延岡は今、大分、宮崎両市に日帰り可能な地域として、存在感を高める。

× × ×

東九州道は、ビジネスチャンスも広げた。

大分県南部の佐伯市は、海の幸・山の幸に恵まれる。中でも、リアス式海岸が育んできた漁業は、江戸時代に「佐伯の殿様 浦でもつ」と称されたほどだった。

佐伯の港の近くに、直売所「さいき海の市場○」がある。アジやカマスなど鮮魚だけでなく、日持ちがする干物などが並ぶ。

佐伯ICから車で10分ほど。週末になると、駐車場の車の半分は、宮崎など県外ナンバーだ。四国からの客もいる。年間売上高は10億円台に